



目次

▲論説

岐蘇林友を如何にすべきか
風塵百題
冗語

▲文苑

滿州紀行
山、山、山
白馬山の歌

▲雑報

學校記事
校友會記事

▲通信

青島から外二篇
會員消息
其他

（日四十月六年四十四治明）（日五十月每） 號四拾八第 日五十二月十年五正大

論説

岐蘇林友を如何にすべきか（承前）
（其三）

丸山 岩 吉

要するに改革の主眼とする所は、言ふ迄もなく現状の不備を改めて、可成理想に近からしめようとするのであり、その要點とする所は、前に要求したやうな態度の人達によつて書かれた、意義と價値とを有するものを、今迄の空疎なるものに代へ、今迄有した特長は、益々助成しようと思ふのである。

林友體裁の改革に就いては、曾て綠山坊氏の要求されたものがある。けれ共僕は全き共鳴をそれから感得し得なかつた。

十二頁の本誌を二十頁に増加する、これは肯じ得る。實際二十頁位が適當であつたかも知れない。けれ共それが爲めには、原稿の關係と經費の關係とがある。十二頁の紙數に於てすら、その掲載すべき原稿の蒐集に、雜誌部諸兄が苦心せられるものと聞いた。二十頁に増加したときに、果して意義ある文字のみを以てその紙上を滿し得られよう哉、すべての空氣が現今の如きものなりとして。

經費の問題、これに就いては綠山坊氏も懸念せられて居つた。大した問題ではなかりさうで、其實林友に關する經濟狀態が甚

しき惑亂のうちにある現況に於ては、考察すべき重大問題であらねばならぬ。これは當局者の精密なる調査の上より來る解答を得て、然る後に討究すべき問題だと思ふ。

しかし僕としては、出來得べくんば二十頁位に増加したく思ふ。それ以上の増加は不賛成であるけれど、けれ共現在の頁數に於てもさう大した不足を感じないが故に、今の所現狀維持を以て得策なりと思ふ。

體裁に關しては此位しか説がない。月一回發行も必要である。

最後に一言致し置くべき一事を持つ。如何なる事業も經費——それに必要な費用なくして實行されない。吾々の絶叫すべき最緊要な問題は、雜誌代に關する整理を斷行されたいことである。これは長い間の懸案であつたらしい。しかも今以て何等その緒に就いて居ない程の貌である。その内情に就いて門外漢たる自分は、これ以上に論ずることは不可能である。唯當局者に向つてこの一事を切願する。

唯この問題は彼の會員の自覺といふことと密接な關係を有して居る。あの自覺が起らなかつたとき、當局者が如何にこれがため努力せられようとも、到底解決に至ることなくして終るであらう。しかるとき吾校友會は恐ろしき畸形兒となり終る。

本論を草し終つて語句の修正少々淨書しようとして居る一日、林友七月號は吾手に

落ちた。この巻末に七宮會長の名を以て、吾々卒業生に向ひこの問題解決の實行にうつることが告げられてあつた。僕はこれを見て衷心よりの喜びを感じた。同時にその解決のために十分の御努力あらんことを切望した。吾は實に吾は此の問題の一日も早く解決せらることを祈願して止まないものである。

以上を以て不完全ながらこの一章を終る。獨斷と偏見と矛盾と不徹底との爲めに、極めて貧弱なものとなり終らしめたことを悲しむ。しかし僕がこの一章に於て力論しようとしたのは、會員一般の自覺を促さねばならぬといふこと及林友の内容について賢明なる校友諸兄の眞面目なる省察を願はんと欲したこと、この二つであつたことを肯じて貰へばそれで足りる。

論究すべき幾多の問題を残してこの拙き一篇を終る。書き終つて通讀するとき、汗顔に堪へない多くを見出し得る。そのうち最も息苦しく感ぜらるるものは、この一篇を單なる空論に陥らしむることを恐れ、具象的により具象的にと努めたに係らず、理想に走らせ過ぎたり、空想の産物に終らせたりした節が、いと多いといふことである。それ等の結果吾賢明なる校友諸兄の前に呈することを幾度か躊躇せしめられた。しかしこれ以上どうすることも出来ない如く感ぜらるるものがあると。本篇を起稿せしめた

最初の要求の尙存するものあることによつて不本意ながらも即ち恥を忍んで迄も、この拙き一篇を諸兄の前に捧げなければならぬ破目に陥つた。

風塵百題 函山居士

清貧に甘んず勿れ (四) 僕はこの頃自己革命として自戒數則を草して日夕座右の銘としてゐる其一則に曰く 從來の粗暴なる生活状態を一變すべし清貧は自ら甘んずべきにあらざるも又深く憂ふるに足らず

と稱して居るのである近頃奥田博士が清貧論を著して以來世の物論盛に起り清貧に甘んずべきにあらざる清貧を以て誇りとすべきであるを稱して奥田博士の清貧論を非難した者さへある ●人の世に處するは豫め一定の標準あるものではないと僕は思ふ其の人の境遇と其の人の性格に依つて各其の趨くところを異にするべきは自然の理である官吏と商人と學者と政治家と農家と漁業家とは其の職務の異なるに隨つて處世の方法も異なるべきは實際止むを得ない次第である

●何人も富を欲せないものはない然し古人は言ふてゐる『不義にして富むは尙ほ浮雲の如し』と寔に人道に反し義理を曲げて迄も富貴を欲するのは既に物質の爲めに精神迄も滅すものであれば決して冀ふべきではないと云ふ言ふて柵から牡丹餅の落つるを冀ひて二六時中成すこともなく怠惰放肆に其の日を過ぎば富貴は勿論其の日の生活にすら困難するに至るを免れない生活に困難すれば最早人間の自由精神はなくなる自由精神を喪失すれば己の志を枉げて人に哀憐を乞はなければならぬ哀憐を乞ふて其の日を過す如き境涯は人生の最大悲惨事ト云はねばならぬ

●故に人間として此の世に生れた以上は經濟の根據より推して如何なる人間も自己の肉体上の圓滿を保ち得るだけの富を欠いては最早其人は獨立した精神を有する人ではないと斷言し度い斯様な人の生活は奴隸的生活に其の日を暮らすと云はねばならぬ凡そ肉体上の圓滿は衣食住の上から云へば最少限度の水平線を畫したものである其以上は其人の働き其人の天分により幾程でも富を蓄積すれば蓄積する程自由を得る譯である而し其富を蓄積すれば又一方に散する工夫をしなければならぬ個人經濟の原則に入るを計りて出づるを制すてふことがある即ち蓄積と消費とは常に平行を保ち調和を保たなければ不時の不幸を招く様なことにな

るのだ

●僕の様な青二才は未だ社會政策を論ずる資格を持たなければ又其れだけの卓識をも有しない而し人間の生活状態は社會政策に重大なる關係あることは誰人も認めてゐるのである即ち賃銀報酬の如き其人の肉体上の圓滿を缺くときは既に其社會は圓滿にして自由なる社會とは言へない資本家の横暴地主の不正等貧富懸隔の甚しきに到れば必ず何等かの方法により之を矯正しなければならぬ或は戦争或は革命或はストライキなどは皆此の貧富懸隔偏重偏輕より起るのである近く新聞紙に報せられたる米國鐵道労働者のストライキの如きは此の適例であらう

●張橫渠(確か宋代の學者と記憶す)曰く人多く安んず於貧賤其實は唯是計窮し力屈し才短にして營畫する能はざるのみ若し稍動き得ば恐らくは未だ敢て之に安んぜざるべし ●清貧に甘んずと云ふ議論は一種の瘦我慢である其の實は計窮し才短にして力屈し暢達することの出来ない怠惰の徒であるとは喝破し盡して餘りあると思ふ世の青年有爲の士は飽迄も積極的に努力奮闘して水平線上に滯步する覺悟を有しなければならぬと思ふ(十月六日神居古潭御料林にて)

元語 桑花子生

●いつか丸山君の語に『生活の分裂』と云ふ事を聞いた、私の耳覺に之程強い、其鳴を與へた事はない、自分の生活がやはり分裂された生活なのであるから ●分裂の生活!それは私にとつては實に深い痛手だ、大切な時を分裂し、淺薄な頭腦を分裂し、力をも分裂する ●けれども不相應な欲心と財力の貧弱な爲に餘儀なくせられたのだ、自ら受けた痛手なのだ!だから殊更これを覆はうとはしない、覆はうとしてもそれは自己一人の力ではどうする事も出来ないから ●然し唯一つの手段として不相應の欲心の放棄がある。けれど生活の分裂から來る痛手がよし全癒したとしても欲望の不満足から來る痛手が直ぐ其の後から生ずるのであらう。

●分裂の生活から來る痛手と、欲望の不満足から生ずる痛手と此の二つを比較した時矢張り私は後者を先づ覆はねばならない、何故ならば、それから來る痛みは到底私には忍び得ないから ●うればならば根本的に他人の力を借りたならば、貧弱な財力を補ひ、欲望の満足を得ることも出来るであらうと、私は左右に大きく手をふる、そして見事に斷る ●私も一箇の男に違ひない、男として強く

文苑

滿州紀行

本多清右衛門 第二旅 順

旅順は我國にとりては日清日露の再役と共に國民の忘れんとするべからざる歴史を有す從て之れが沿革等を述ぶるも敢て徒事にあらざるべし以下大体の出來を述べんとす 英國人は旅順を『ポーツター』と云ひ露人は『ポルトアルトル』と稱せり關東洲の最南端に位し交那に於ても今より凡一千九百年前勃海國時代に旅順を稱したるもの如し老鐵山、黄金山は唐時代には鐵山、金山と稱し黄金山下の古碑は唐の蘇韜策明使鴻廬

卿催忻が寄港の紀念として建設したるものにして歴史上有名なり

元來旅順城は明の遺蹟にして旅順を去る一里の水師營は清の大宗山東を刺清するの時

軍船を出帆せしめたる所たり亦日露役に於ては露將ステツセル將軍と乃木大將との會見所たり

康熙帝の朝此の地に水師營を設け海警に備ふ現今の水師營は其の殘影なり而して旅順

を軍港となせしは三十餘年前當時の直隸總督北洋大臣李鴻章が渤海防備の爲旅順威海

衛を經營せしを起因とす東港の營造物は其の頃の遺物たり港は東西の二港に分れ即ち東港、西港と稱す西港の合して外海に通ず

一條の水道を旅順口と云ふ其の幅員二百七十三米突即百五十間余に過ぎざれど水深く大艦巨船の來往自在なり左は黄金山砲臺右は老虎尾半島に扼せられ背面は丘巒重疊天然の障壁を築き防守に易く攻畧に難き要害の地なり

停車場は龍河の邊り白玉山下にあり之れを中心として舊市街新市街に分たれ以東を舊市街以西を新市街とす前者は東港に面し後者は西港に面す新市街は主として諸官衙學校官舎にして其の建物は露國時代の遺物にして宏壯を極む舊市街は商業地にして會社商店軒を並べり旅順民政署管内の戸口は二千六百二十五戸九千八百九人を有す而して日本人は五六千人在住し市街は殆ど日本人

なし之れにより昇降せり又砲彈型臺の中には堅四尺横七尺二寸五分の表忠塔記の額面あり明治四十年六月二十日起工し約二載の月日を重ねて四十二年十一月十二日竣工せり其の竣工式は旅順ありて以來殆ど空前の儀式を挙げたりと云ふ

子、黄金山下の海水浴場 露國時代別荘地域と稱せられたる黄金臺の南にあり後に黄金山を負ひ白砂遠く連りて渤海灣の澎湃たる海波に洗はれ滿州有数の海水浴場たり

以上は旅順に於ける主なる名所にして此の外赤十字病院あり元露國皇后陛下の企望により設立したるものにして建設の規模至つて宏壯なり次に旅順要塞紀念品陳列館日露戰役戦利品陳列場たり尙露國共同墓地水師營等あり而して水師營に就ては前陳せし所の如し(未完)

山、山、山、(下の下) 旅行日記の中より 岩田生

その日正午再び連絡汽船に乗りて宮津を發す。風靜にして波穩なれば悉く甲板に出で舷に寄りて來し方の風光に袂別の眸をはなちて風懷綿々たる裡に船は何時しか海舞鶴に着きぬ、此處より汽車に乗り替へて京都に赴く。十又二日の旅に疲れ果てし今日の我等には車中は一の安眠の場所なり、始めは心を浮き立たせたる轍の響も今は恰も

市街を形成す關東都府府は旅順にありと雖も商港としては大連に依り將來此の地の發展は到底望まれ難かるべし

二名所

イ、旅順工科學堂 明治四十三年一月二十日の開校にして工業に關する高等教育を授く科目は機械工藝科電氣工學科採鑛冶金學科及普通學科の四科にして入學資格は中學校若しくは工業學校を卒業したる滿十七年以上のものとする

ロ、旅順中學校 明治四十二年五月一日の開校にして同年十月二十八日今の大迫町に移る其の程度は内地に於ける府縣中學校と同等とす

ハ、後樂園

新市街大迫町の海岸にあり東西百二十間南北百間の小規模のものなれども樹木鬱蒼として夏時の逍遙に佳なり園内温室あり四時花卉を貯へ音楽室あり旅順唯一の公園たり

ニ、ニコライ堂敷地

龍河左岸の高地港口に面する所にあり停車場を距てて白玉山と相對す露國が六十餘萬圓を投じて東洋第一の大伽藍を設けんとし已に敷地を設けしも未だ成らずして開城となる停車場より新市街に通ずる右側の高所に石材根基の壯大なるもの即是なり

ホ、白玉山

旅順停車場の前に高く矗立せる高丘にして海拔四百八尺龍河は西方に繞り敷場溝其の

東を流れ南麓は近く港口の水道に濱し新舊市街の中間に横たはれり頂上より四方を眺むれば旅順の市街は眼下に指點す可く背後の諸山は一起一伏、臥牛奔馬の如し亦遠く港外を望めば渤海灣の煙波洋々として際涯なく風光頗る佳なり納骨堂、表忠塔共に山巔にあり登山には東西南の三道あり何れも馬車に依り昇降し得べし

ヘ、白玉神社

白玉山上の納骨堂を稱して白玉神社と云ふ旅順要塞戦に参加して名譽の戦死を遂げたる海陸軍將卒二萬二千七百十九の英靈を合祠せる所なり納骨祠は約七尺の石垣を疊みて方約二十餘間の臺を築き臺の上面はコンクリートを以て固め周圍に鐵柵を繞らし東西南の三方に石段を設け臺の北隅に更に一段高く石を疊み下部には遺骨を保存し上部は横九尺縦六尺の石造祠殿を建つ正面の階下には華表あり華表の兩側に高十尺の石燈籠一對あり尙其の左右には皆て東鷄冠山西砲臺の備砲たりし二十五砲二門を裝置せり毎年五月十一月の兩度に大祭を行ふ

ト、表忠塔

東郷乃木兩大將の發企建設したる一大高塔にして白玉山上にあり其高さ二百十五尺下部四十尺は花崗岩を積み上部はコンクリートをを用ひ頂上の砲彈型は高さ二十九尺外徑十一尺あり周圍は鐵柵を圍らせり塔の内部は十階にして螺旋狀二百四十三段の階段あり

夢裡に誘ふ子守唄の如く、座を占むるや直ちにぬむりて時々は頭を意に試み或は我ながら野聲の高まりたるにフト我に返りたる時車中の目が我が顔に集り居るに滅入りたく思はるる事も屢々なり、かくて夢幻の裡に汽車は保津峽に入れり。我等の車中に同じく天橋遊覽の團體にて京都の人達らしきが同乗せり、中に一人の嫺雅ありて聲色巧に「御客さん此處に映りましたのが名高い保津の早瀬であります、此處から舟に召されると僅か二時間餘りて嵐山へ着きます」幾十尺の足下には清冽なる溪流歌巖を嘯み綠翠を貫きて我等の汽車と共に京へ京へと急げり、「エー御客さんあれが愛宕山それが笠山であります、後は畫面の展開につれて次第に説明を加へます」汽車は進みて風景は展開せり「ここに見えるが櫻と紅葉の嵐山であります、これは義經の鞍馬山と江州境の比叡山と共に京の三山と申します」それが何々陵これは何寺と口賢しく喋る裡に汽車花園に着くや嫺客は飽くまでをかしく會釋し車中を賑はして下車せり。西山一帶の諸寺より響く鐘の音に迎へられて京都に着く、大阪が水の都なるに對して京都に實に山と水との都なり、東に東山、北に北山、西に西山の諸山圍繞し而して東に加茂、西に桂の兩川縈紆し所謂山河襟帯自然の城をなせり、入洛の翌朝伏見

畏き極みたるを、一行の帝陵を拜する頃雨蕭々として遠山近郊臨にかすみ、四隣圓として人の世は負なり、崇高とや言はん、森嚴とや言はん、思はず標を正して陵の大御前に額きて無邊の仁慈と至大の洪業とを想起し奉り畏さに涙自ら湧きぬ。仰ぎ觀れば佳城、崇高森嚴を極めて敬虔の念油然として起り暫時は御前を退くを忘れたり

御陵参拜後は自由行動を許され各自求めたる地圖を特みに東西に馳走して名所舊蹟を探討せり、京都の第三日の朝は七條驛より向日町まで汽車に乗り近郊の竹林を視察せり、明日大津市に於てスミス氏の宙返り飛行ありと聞き一行の心は一向大津に向ふ四月八日スミス氏が青山練兵場に於て宙返り飛行を演じ幾萬の觀衆否國民をして呆然たらしめしより各新聞雜誌はその妙伎を歎賞して日日其記事を掲げざるは無く各都市は競ふて氏を聘してこの妙伎を演せしめたり、然るに我等は僻邑にありて之を觀る能はざりしを深く憾とせしが何たる奇縁ぞ明日は琵琶湖畔に此の破天荒事に接し得らるゝとは、この奇遇に雀躍して京都を辭し大津に向ふ電車の中に俚語二つ

風も靜かな琵琶湖の面に
明日は巴の波が沸く

猿も時には枝から這る
心して飛べ湖の上

明くれば琵琶湖畔には觀客の山は築かれ、

湖面は宙返りの影を映して巴に渦巻きの、(當日の飛行の模様及び登山などの記事は六月號に悠久生が健筆を振へるを以て此處に省略す)

「連や志賀の都はあれにしを、昔長良の山櫻かな」と、平忠度は身世の忽忙を嘆きしが、我等は今この濃情の歌人を憶ひ同じ感

水年々に漲溢し、橋を渡れば林區署の、入、火、傷、採の四つの文字、是より白馬の麓まで

屋に着きたる頃春雨蕭條たり今宵は雨聲を聞きつゝ金鏡城下に最終の夢を結びぬ、瀬戸の山一砂防工事視察の爲名古屋より電

和歌

熊鷹の鳥追ふて飛ぶ秋の野を、炭焼くけむり細うたなびく、馬子唄は時の方に消ね行き

やがて金箭亂射して、大日輪は現はれぬ、思はず識らず萬歳を、聲を併せてごよめきり

學校記事

○始業式 九月三十日前期試験成績発表と同時に講堂に於て終業式をあげ校長の訓辭ありしが十月二日、後期始業式を講堂にあ

入相の鐘もいつしか音絶わて、哀れまじらの月になくなり、稻の穂は風のまに、波たちて、村の雀のむれて飛ぶかな

白馬登山の歌

時は大正五世の、赤星長野縣知事は、其名も高き白馬の、山や林を守る身の、抑も是より先づ日に

又宮川教諭は本縣理科展覽會視察の爲十月三四五六の四日間長野市に出張歸校後更に、楢川、日義、駒ヶ根等へ礦物採集の爲出張せ

庭球部記事

赤羽村、井上寛、宮澤、小野澤、ハ負○ハ勝 (二組は優待組)

大隊が渥美郡高師村の演習廠舎に行つて毎日猛烈な演習に汗を流してゐる頃だつた誰いふとなしに第一中隊が青嶋守備に行くさうだと言ひ傳へられるから後は寄ると觸るとこんな話ばかりで持切つてゐたがなかつた青嶋行きの命令は出なかつた

たしか八月廿九日だつたと思ふ、僕は公で外出する事になつて營門を出て小池の舊道を通ると突然恩師一先輩川崎先生に出遇ふた、此時分先生は後備召集に應じて第七中隊に来て居られた、お別してから四年目の再會だ、四年の昔と今先生には一寸もた變りがない、先生の下宿に伴はれ、なつかしい昔を語ることを暫時。

三十一日先生の計ひで先生に所合君に早川君に僕と四人札本のとある旅舎の二室に會合して昔をしのび今を語り且又僕の出發を祝してくれた此日代田君、大洞君古畑君も来る筈であつたがそれ／＼のつびきならぬ公用で一所に會合の出來なかつた事は最も残念のことであつた。

呼ぶ聲に上甲板に飛び出すと七日午前二時船は膠州灣の入口、會姓岬の附近に停船してゐた。見よ！右前方約四吉米の陸上を電光燦爛不夜城の如き青島市は目前に展開してゐる。

○原正造君より

最近會長宛の通信大路左の如し 前畧扱本年野葉中痛切に感せしは人夫使用難の一事に有之候御承知の如く施業上樹種も割合に少なく利用の途も殆どバルブにのみ使用せられ境界測量などもクリノメーターコンパスを使ふのみにて簡易極まり技術としては左程痛痒を感せず候へ共柔順とは云へ殖民地まで出稼する人夫なれば其心裡を察して上手に使ひ廻すははまだ卵殻を負へる私などには旨くは參らず候さて又學校實習中は百何十點の面積三十幾町位を十數日かけて完全には遂行せられざりしと存候然るに當島は經濟上左様の精密を要せず日々の測點少なきも五六十點多きは百二十點、距離は千七八百より三千五六百間に及び加之丈なす筈、イタヤ、五葉松、ハヒマツ、アラ、ギ等の密生ありて餘程の困難を感じ申候(中略)本年度には測量助手として十名許増員の由聞及び居り候何れ母校よりも採用の事と存候が先づ身体強健にして年齢も高く實地練習の腕前あるものが恰好と被存候(下略)

會員消息

○宮澤功君 今回森林主事に陞任、新潟縣小出町小林區第二號保護區に轉任せり
○萩原惠治君 同じく森林主事に陞任茨城縣大子小林區署に轉任せり
○松川久吉君 今回臺灣大寶農林部に勤務する事とされ

○森下義郎君

五月以來、樺太太子製紙會社に勤務せられたる由會長宛通報あり
○水田精一君 母校卒業後直ちに渡米し其後布哇に渡り農林業商業に従事すること殆ど十年なりしが今春歸郷、墾て婚約ありし福島町吉田家の婿となり吉田と改姓せられたり
○野村光智君 今回群馬縣農林業技手に任ぜらる
○池田伸治君 今回駒場農科大學演習林本部に勤務の事とされり
○鳴田勘四郎君 松本小林區署に轉任
○野村光智君 林業技手として群馬縣農務課に轉任せり
○伊藤正之助君 山梨縣鐵道管理課出張所に轉任
○大森悦君 病氣の爲八月林區署を辭職し目下小縣郡長瀬村自宅に療養中
○百瀬三一君 熊本大林區に赴任せる同君は二疊に冒されし爲辭職歸郷し自宅に靜養中
○喜多村弘君 脚氣病の爲歸郷療養中なるが輕快に赴きたれば不日歸任すべし
○川岸滋次郎君 今回福島縣石城郡日立磯山事業所に轉勤せられたり
○木下、高橋兩君改姓、木下清君は尾重、高橋金作君は高野と何れも改姓せられたり尙高野君は秋田縣上小阿仁小林區署に轉任
○齋藤正雄君 長野小林區署へ轉任
○高橋作次君 飯山小林區署へ轉任
○和田宗吉君 群馬縣沼田小林區署へ轉任
○中村豊治君 新潟縣村上小林區署へ轉任
○木下稗藏君 山梨縣韭崎管理課出張所に轉任

寄贈書目

熊本大林區人吉小林區署一勝地製材所要覽
同一勝地製材所案内 山下藤一君

林友代領收報告

金一圓	北川 信美君
金二圓	小林 恭一君
金一圓四十四錢	小羽根 安治君
金一圓五十錢	安藤 次郎君
金二圓	原 恒君
金一圓二十六錢	藤田 義正君
金二圓二十錢	米山 修君
金二圓	高柴 眞次郎君
金一圓	丸山 久雄君
金一圓	辻 敬二君
金一圓	篠原 忠治君
金二圓	松島 九平君
金一圓	宮入 汎省君
金一圓五十錢	木村 康明君
金一圓	市岡 新八君
金一圓	黒岩 正平君
金一圓四十四錢	木下 神藏君
金一圓四十八錢	小池 金三郎君
金一圓四十二錢	小瀧 升太郎君
金一圓四十九錢	岡田 彌兵衛君
金一圓四十四錢	嶋田 雄太郎君
金一圓	嶋田 英一君
金一圓	前田 正義君
金一圓	若林 遊龜尾君
金一圓	温井 誠一君
金一圓	田中 吟重君
金一圓	野田 宗作君
金一圓	野里 慶助君
金一圓	伊藤 美行君
金一圓	伊藤 益雄君
金一圓	坪倉 藤三郎君

金一圓四十四錢	篠原 爲一君
金一圓九十八錢	原田 義治君
金二圓	杉本 貫君
金一圓六十二錢	峰須賀 宮次郎君
金一圓九十八錢	上田 續一君
金二圓	尾重 清君
金二圓十六錢	徳武 國久君
金一圓四十四錢	原 七郎君
金一圓	山本 政之丞君
金一圓	松本 清太君
金七十二錢	山下 藤一君
金一圓六十二錢	新田 穰君
金一圓二十六錢	岡田 廣治君
金一圓九十八錢	中村 豊治君
金一圓	乙谷 耕吉君
金一圓	大嶋 角藏君
金一圓九十八錢	松澤 万吉君
金一圓九十八錢	寺嶋 俊一君
金一圓	但馬 廣造君
金一圓	宮田 實君
金二圓	本多 清右衛門君
金一圓六十二錢	肥後 金四郎君
金一圓	山村 次一君
金二圓十八錢	高野 金作君
金一圓九十八錢	小松 精内君
金一圓	今井 安男君
金九十八錢	中嶋 要人君
金二圓	上條 嘉一郎君
金九十八錢	長谷部 兵治君
金五十錢	竹内 房太郎君
金一圓八十錢	志津 忠次郎君
金四十八錢	塚本 三樹君
金二圓	野村 光智君
	大脇 又衛君

金一圓九十八錢	下條 初太郎君
金二圓	北村 竹次郎君
金三圓	市川 左金吾君
金一圓	岡四 謙三君
金一圓五十錢	長谷川 義雄君
金二圓	林 與五郎君
金一圓二十錢	鷲 澤 忠治君
金一圓九十八錢	樋 口 勇君
金一圓	宇佐美 周 紫君
金一圓九十八錢	岡田 恒治君
金二圓	永田 精一君
金二圓	征矢野 余所夫君
金一圓二十六錢	河島 憲一君
金一圓三十四錢	由尾 忠助君
金三十六錢	林 勸次君
金一圓	本多 清右衛門君
金二圓	中嶋 源一郎君
金一圓	甲田 林君

雜誌覽中へ特別寄附
永田 精一郎君
金二圓

告

○岐蘇林友代は一ケ年金參拾六錢に有之尙
五ケ年間誌代として壹圓五拾錢納入の便法
も有之候御照會の向も有之候間一寸申上置
き候

大正五年十月廿三日印刷
大正五年十月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人 安 井 正 夫
長野市西後町丙二十一番地
印刷者 田 中 彌 助
長野市西後町乙二十一番地
印刷所 長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所 蘆 澤 書店